

### 岡倉覚三『日本の覚醒』巻末年表 註

岡倉覚三は、1904年、The Awakening of Japan『日本の覚醒』をニューヨークの出版社から刊行します。英語で書いた著作三冊のうちの二番目に当たる著書です。

これは、端的にはアメリカ人のために、「日本」の思想的現況を紹介することを目的とし、開港に至った動向とその後の展望を語っています。その巻末に、インドと中国、日本を三列に並べて、見開き2ページに、じつに簡潔な古代から近代（当時の現代）までの略年表を、付録としてつけています。

これは、一つには、「日本」はアジア古代の遺産を大切に「現代」を作ろうとして生きたこと。もう一つは、近代に至ってヨーロッパの侵略を受けるまで、「アジア」は大きな繋がり（共同体と言ってもいい繋がり、原文で Unity of Asia と表現している）を形成していた、ということ。この二つが、本書で強く伝えたいところだったので、それを年表で示そうとしたものです。本文では、こう言っています。古代アジアにあつては、「不思議なことだが、一つの国が人類愛ヒューマニズムのより高度な表現へ到達しようと努力するごとに、他の国にあつても同時に並行してその運動が見られる」と書いています。それを裏付けようとする年表です。

この幸せな「Unity」はまず13世紀のモンゴルもうこ族成吉思汗じんぎすかんによる侵略で壊され、それから立ち直るいとまもなく、ヨーロッパ諸国の植民地化によってアジアは「いまや、お互いに知り合うことのなんと僅かになってしまった」事態になりました。このヨーロッパ近代大国による植民地化も、「同時に並行して見られる」年表になっていて、簡潔だけれど、なかなか読ませる年表です。

あとで、じっくり考えたいのですが、こういうふうには歴史を観る視点を、いまわれわれはどこかへ忘れてしまった。そのためになにか、大きなものを見失っている、そんな気がして、この岡倉作「アジア略年表」は、じっくり味わって見る価値があるように思ったのです。しかし、現在のわれわれの眼から見ると、岡倉がこれを執筆した時代からその後、歴史学もうんと精度をあげ蓄積も出来ましたから、とくに年記に関して修正補足しなければならぬ箇所などいろいろ見受けられ、これをこのまま活用するわけにはいかない。

岡倉は、おそらく日本の時代区分など（The Ideals of the East『東洋の理想』でもやっていますが）敢えて大雑把に表記しようとしていたところがあります。そのほうが伝えやすい、と考えたのでしょう。その問題提起を受け止めるためには註釈をつけておいたほうがいいようです。以下はその註です。（年記は、和暦や中国の年号は敢えて併記しないで西暦だけにしておきます。）

## 「インド」

**佛陀=釈迦牟尼**：生没年については、540B.C.~491B.C.その他諸説あり。岡倉が**623B.C.**を選んだのは何を典拠にしたか不明。

**アショカ王**（阿育王）：マウリア朝第3代王（在位諸説 268~232、269~232、273~232）

**カニシカ I 世**（迦膩色迦王）：生没年不明。クシャーナ朝（80B.C.~273A.D.）の国王、在位は144A.D.~173/164 説が有力。『後漢書』の125A.D.頃に相当する記事には、「カニシカ」への言及なし。岡倉の典拠**50A.D.**も不明。

**ヴィクラマディティヤ**：伝説の古代インド王。（102B.C.~?）。**550**年の出典不明。

**シャンカラ**：初代シャンカラ（700A.D.~750A.D.）8世紀に活躍したバラモン系哲学者。

「アドヴァイタ（不二一元論）」（梵<sup>ブラフマン</sup>我<sup>アートマン</sup>同一）を唱える。（「梵<sup>ブラフマン</sup>」はバラモン哲学で宇宙の根源原理のこと。「我<sup>アートマン</sup>」は、自我、身体、呼吸、人間の本性、物一般の本性。）

アドヴァイタ・ヴェーダ哲学。

**マフムード**（971A.D.~1030A.D.）：現アフガニスタン、ガズニーを首都としたイスラーム王朝**ガズニー朝**最盛期の君主（在位 997~1030）。17回にわたり北インドを攻め大国を築いた。**1024**年は、インド西部グジャラートを攻めた年。セルジューク朝(1037~1157/1308)の創始者トゥグルル・ベク(990~1063)以前にスルターンの称号を用いた最初の人物。

**1219年**：この年から1224年はチンギス汗の西征として知られる。

**チムール**（帖木児 1336~1405）：ヨーロッパではTamerlaneと呼ばれる。1370年サマルカンドに王国を創始、1380年にインドへ侵略、1395年西アジア統一。**1398**年デリーを略奪。王国は1500年まで続く。

**ムガル帝国**：**1526**~1858。チムールの子孫バーブルがデリーを占領して建国。版図を拡大。1858年イギリスに滅ぼされる。インド史上最大にして最後のイスラーム王朝。

1600年、ロンドン東インド会社設立。

1623~52年、タージ・マハル建造。北部アグラ、ジャーナ川右岸に、ムガルのシャー・ジャハーン帝が妃ムムターズ・マハルのために建てた白大理石のイスラーム廟。

**シヴァージ王**：シヴァージ・ボンスレ（1627~1680）。中世インドのヒンドゥー教王国**マラータ国**創始者にして初代君主（在位 1674~80）。**1664**年はシヴァージがスラットを攻略。マラータ王国はヒンドゥー諸族と「マラータ同盟」を結成、イスラームやイギリス勢に抵抗したが、三度のマラータ戦争に敗れ、滅亡（1818）。

**1757年ブラッシーの戦い**：カルカッタ（現コルタカ）北方のブラッシーでイギリスの東インド会社軍がムガル帝国のベンガル太守シラージュ・ウッダウラを攻略。イギリス勢力の確立。1780年にはインドで最初の英字新聞が発行されている。

1767~1799 年のマイソール戦争：南インドのマイソール王国が東インド会社と四度のわたって企てた戦争。I = 1767~69、II = 1780~84、III = 1788/90~92、IV = 1798~99。

**1803 ムガル帝国終焉**：1803 年イギリス軍がオリッサを占領した。ムガル帝国のイギリスの保護下に入るのは 1804 年。

**1858 年イギリスのインド直接統治**：セボイの乱は 1857 年 5 月から始まった。9 月には、デリーが陥落、イギリス軍は 58 年 3 月。デリー北東のラクナウを攻略、大殺戮を行った。8 月東インド会社を廃止、11 月イギリスはインドを直接統治下に置き、ムガル帝国は滅亡。インドは「英領インド」と呼ばれるようになる。

## 「中国」

**老子**：岡倉は老子を孔子より先に持ってきた。しかし 604B.C の典拠は不明。おそらく『史記』の「列伝」にある司馬遷の「老子は楚の苦縣厲郷曲仁の人。名は耳、字は聃、姓は李氏。周の守蔵室の史だった。[中略] 周に長く勤めていたが、周に見切りをつけ都を出た。関所の長官尹喜曰く、子將に隠せんとす。この機会に、我が為に書を著せ、と。ここにおいて老子、一書上下篇、道德の意を言うこと五千余言を著して去った。その後どこへ行ったか誰も知らない」を典拠にしている。老子が周を去ったのは、東周中期、楚の莊王(?~591B.C. 在位 614B.C.~591B.C.) の時期とみなすことができるが、やはり、なぜ 604 年なのか不明。

**孔子**：儒家の祖孔子の生年は 551B.C. 年 (552 説あり)、没年 479B.C. この時代、春秋時代と呼ばれる。春秋時代は周王朝の後半期、周が東西に分裂した 771B.C. から 402B.C. を言う。

**秦**は、221B.C.~206B.C. の王朝。221B.C. 年、始皇帝はこの年中国を統一した。

**漢**は、前漢(202B.C.~8A.D.) と後漢(25~220) に分かれる。

**67A.D. 年佛教伝来**：『洛陽伽藍記』巻四に、後漢明帝(25~57) が金人(佛陀)の夢を見て大月氏国へ使者を遣わし『四十二章経』をもたらせ(「感夢求法説話」、洛陽城西陽門三里の地に白馬寺を建立した(それが 68 年)とある。この説話が中国佛教伝来の始めと信じられてきた。岡倉はそれに基づいている。

**220 三国時代**：大陸が魏(220~265)、蜀(221~263)、呉(222~280) に三分割されていた時代。

**268 六朝時代**：後漢滅亡後、隋(589~618) の統一まで、建業(現南京) 都を置いた、呉、東晉(317~420)、宋(420~479)、齊(南齊 479~502)、梁(502~557)、陳(557~589) の六国の時代のことを「六朝時代」という。岡倉は、呉がいったん都を武昌に移したあと再び建業に戻した 266 年を、誤って 268 年としたのか。いずれにしても三国時代に属する呉の終り近くに、岡倉は、六朝時代の文化の開花を診ていたのだろう。

**618 年**に唐が興り **907 年**まで続いたあと、分裂時代に入り、十国と五代(後梁、後唐、後晉、

後漢、後周)が960年まで続いた。そのあと、960年~1126年は宋(北宋)の時代。岡倉はきちんと換算してその始まりの年記を記している。つぎの、

**1100年モンゴルの勃興**は、西・中央アジアではいわゆる「十字軍戦争」の時代であるが、この1100年に特別中国大陸で、モンゴル族の台頭があった記録はない。ここになぜ「モンゴルの勃興」を入れたのか不明である。が、それから100年後の、1206年にはチンギスハン(太祖)が生まれ(1227年没)、**1260年**には、チンギスハンの孫クビライ(世宗、フビライとも)が中国大陸で即位し、1271年「元」朝が始まる。こうして、**1368年**、漢人朱元璋が元を倒して「明」を興した。

以下、中国の近代史に関しては、岡倉の記述どおり。

## 「日本」

**660年日本最初の天皇**：紀元元年を西暦に換算すると660B.C.

**285A.D.儒教伝来**：儒教がいつごろ日本列島の知識人へ伝えられたか。岡倉は古墳時代、それも卑弥呼の時代(230~250?)ではなくその後に行っているが、なぜ285年と妙に細かい年記にしたのか、不明。

**552 佛教伝来**：「日本書紀」の欽明天皇十三年壬申の歳十月、百濟聖明王が佛像佛典を献上したとあるのを「最初の佛教公伝」の根拠にしている。しかし、この聖明王の上表文として引用するなかに『金光明勝王經』とある、これを唐の義浄が漢訳したのは703(長安二)年。もう一説が538年説、これは「元興寺伽藍縁起并流記資材帳」(724)や「上宮聖徳法王帝説」(824年以降成立)に「欽明天皇の戊午年、聖明王云々」とあるのを根拠にする。しかし、欽明治世の540年から571年に「戊午」の干支はないので、欽明以前に最も近い「戊午」年として538(「日本書紀」では宣化三)年をとっている。

**700 奈良時代**：平城京遷都は710(和銅三)年。

**800 平安時代**：平安京遷都は794(延暦十三)年。

**900 藤原時代**：藤原時代は平安時代後期、和様文化の深まる時代として894(寛平六)年の遣唐使廃止が一つの指標になる。

**1150 王政の衰退**：1151年に格別なにかがあったか、指標になる事件を探しにくい。おそらく岡倉は、保元の乱(1156年、天皇方と院政方の争い、この時は院方が敗北した)を念頭に置いているのか。頼山陽の説にしたがって岡倉は、日本史を「天皇直接支配の時代」と「將軍支配の時代」に二分して見ようとしており、この小さい年表で**1334年**の「建武中興」を入れ、それを強調している。以下は、幕末明治へかけての西洋諸国との関係に関する超簡略年表である。